



# 春ニンジン

山武経済センター  
営農指導員 伊藤 統之

# 農業 テクニカル ダイアリー

Agricultural-work technical diary



# 半促成ナス

第一集出荷センター  
営農指導員 川島 俊一

● **トンネル内の温度管理**  
トンネル内の適温は20～25℃(限界30℃)となります。4月以降は高温になりやすいので、換気不足による葉焼け

● **被覆資材**  
ハウスでは、濃ビ・POを使用します。濃ビを使用した場合、POに比べ4～5日程度収穫が早まります。一方、トンネル資材は濃ビを多く使用しています。古ビニールは、低温時に地温の確保が出来ず、抽苔を助長することもありますので注意してください。

● **播種**  
播種前に土壌内に水分を確保してください。ただし、水分の多い状態で播種した場合、発芽が不安定となる(地温が上がる)ので注意してください。

● **品種選定・管理**  
品種の選定に当たっては、収穫時期と品種特性を考慮し、行ってください。作型別では、表①を参考にしてください。

● **天敵導入前の準備**  
天敵農薬の導入後は、天敵が定着するまで化学農薬を控えなければなりません。スワルスキーの場合、温度にもよりますが、定着するまで2～3週間程度必要となります。その間、病害虫が出ないよう導入前に極力、病害虫を抑えておく必要があります。天敵導入時期は特に、うどんこ病やアザミウマ、コナジラミが増える時期となるため、天敵への影響日数を確認しながら防除



## 品種選定・管理



## 害虫防除



写真③ ヒョウタンゾウムシの食害痕



写真② ヒョウタンゾウムシの幼虫(左下)と成虫(右)

けに注意してください(高温時にはすそ寒気を行う)。

近年、春ニンジンの栽培において、ヒョウタンゾウムシによる被害が問題となっています。ヒョウタンゾウムシは、トンネル被覆を除去した後に、成虫(写真②)が畑の外から侵入し、土中に産卵します。その後、羽化した幼虫が根部を食害



## 天敵農薬を使用するうえでのポイント

ナスで発生する害虫の中で、特に問題となるものの一つにアザミウマ類があります。アザミウマは、葉や花の表面を食害し、果実ではコルク状の傷を作り、正品率を著しく低下させます。

近年、第一集出荷センター管内の半促成ナス栽培では、アザミウマ類の対策として、天敵農薬(スワルスキー)を使用する生産者が増えています。天敵農薬の使用は、一度定着してしまえば継続して防除できる(省力化につながる)とともに、「薬剤抵抗性が発生しない」「薬剤抵抗性の害虫を防除できる」などの利点があります。一方で、化学農薬の使用制限などもあります。



## 天敵導入前の準備

天敵農薬の導入後は、天敵が定着するまで化学農薬を控えなければなりません。スワルスキーの場合、温度にもよりますが、定着するまで2～3週間程度必要となります。その間、病害虫が出ないよう導入前に極力、病害虫を抑えておく必要があります。天敵導入時期は特に、うどんこ病やアザミウマ、コナジラミが増える時期となるため、天敵への影響日数を確認しながら防除



## 導入後の管理

定着後もアザミウマの密度や食害を常に確認することが重要です。アザミウマが増えるようであれば、スワルスキーに影響の出ない(出にくい)薬剤を用いて防除を行います。6月以降になると、急激な害虫密度の増加で、スワルスキー単体では抑えきれな



## 導入時期

スワルスキーは15℃以上にならないと活動が鈍くなります。最低でも13℃以上が維持できる時期に導入しなければうまく定着せず、その後の防除が後手に回る可能性が高くなります。導入のタイミングは、加温タイプのハウスで4月上旬～中旬、無加温タイプでゴールデンウィーク前後がよいでしょう。例年、導入の時期が早すぎると、うまく定着させられない圃場も見られます。あまり急いで導入するのではなく、しっかりと温度が確保できるようにしてから導入するようにしましょう。

しましょう。また、スワルスキー自体は成虫を捕食することができないため、粘着版等を設置するなどして、飛び込みしてくる成虫を捕獲し、密度を高めないように工夫することも重要です。

表① 春ニンジンの作型と品種

指定品種	播種時期	収穫適期	特性
彩誉	12/下～1/上	5/上～5/下	極早生品種。形状が良く根色も良い。しみ症に対しては強くないため、発生が予想される圃場では、作付けを控えた方が良い。低温期が長期にわたった場合、抽苔しやすい(日照条件の悪い圃場は避ける)。
愛紅	12/下～1/中	5/下～6/上	早生種。肥大良好である。彩誉と同様、しみ症にはやや弱い圃場の選択に注意する。
TCH-712	1/中～2/下	6/上～6/下	早生種。TCH-711に比べるとやや長くなる。しみ症に対しては強いほうである(極端な遅播きは、しみ症の発生がある)。
向陽2号	1/下～2/下	6/上～6/下	中早生種。しみ症に対しては強いほうである(TCH-712と同程度)。
ベーターリッチ	1/上～2/中	6/上～6/下	中早生種。しみ症に対しては強いほうである。根色が良いが、根長は長めとなる。

対策としては、スタークル顆粒水溶剤(400倍・0.4g/L/m<sup>2</sup>・株元灌注)、またはコテツフロアブル(2000倍)を散布しますが、散布時期が重要です。ヒョウタンゾウムシの発生ピークは年によって差がありますが、ゴールデンウィーク前後(5月上旬)に散布をする、防除効果が高い傾向にあります。



写真① アザミウマによる食害

くなる場合があります。あらかじめ抑えきれなくなることを見越して、計画的に別の天敵(タイリクヒメハナカメムシ等)を導入するか、効果の高い化学農薬による防除に切り替えるか、早めに見極めるようにしましょう。

8月の分析経過について	
残留農薬分析点数	合計0点
多成分一斉分析	※8月は実施なし。
土壌診断点数	合計43点